

ここでは、4月1日開校の「ひたち野うしく小学校」の校歌や「牛久音頭」「河童ばやし」を作詩した中島清治氏をはじめ、市内出身でご活躍の作詩家を紹介します。

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

◆「ひたち野うしく小学校」校歌

の作詩者―中島清治―

《寄稿》うちあけ話―中島清治―



あいつは三十路を越せないだろうといわれながら、いつの間にか80(昭和6年生まれ)の坂が目前。目を閉じれば、さまざまなことがよみがえる。

牛久村大字新地(現新地町)の半農半商の家に生まれ、小学校3年のとき母親が病死。兄、妹2人と祖母に育てられ、国民学校6年卒業と同時に大東亜戦争に巻き込まれ、町内の軍需工場に学徒動員された。油まみれになって国のため働いたが終戦。学校に戻る。高等科を卒業後、祖母が死亡。虚弱体質にむち打って東京へ働きに出たが、仕事はガス管工事のため

今度は泥まみれ。3カ月後には体を壊し国立病院に入退院を繰り返した。そのころ歌謡誌「詩人座」発行に誘われて作詩家板倉文雄先生の門下に入る。そして池田充男さんを知り交流が始まる。池田さんが東端穴在中のころは、板倉先生宅からの帰りに押しかけ、朝まで語り明かしたこともある。千葉の市川へ越せば市川へ、東京亀有に越せば亀有へ、上福岡、座間、逗子へお邪魔したことが昨日のことのようだ。奥さんにもだいぶお世話になったが、まだ恩返しはしていない。

話は戻るが昭和31年5月、浪曲横綱、広沢菊春師口演『姿三四郎』の主題歌『姿三四郎』(広沢菊若唄)が45日間、文化放送から夜10時放送された。海、山のものとも分らない馬鹿息子の将来を心配していたおやじに聞かせることができて「よかった」と思っただのもつかの間、翌年3月郵便局に勤務中車に追突され即死した。通夜葬式の日、作曲平柳晴司、編曲の清水路雄、歌手の津田耕次が来てくれ

た。クラウンレコード創立記念曲発売に詩を間に合わせてほしいとのこと。ドタバタ中でつらかったが、社会風刺に事故を面白く取り入れることで気分を紛らわせた。その歌が「お聞き下さい皆様よ」となり、津田耕次のデビュー曲となっただけに忘れられない。また、テレビ朝日の連続ドラマ、谷幹一主演『明治一代男』の主題歌「先にごめん」のときは大変だった。三日三晩悪戦苦闘して書き上げた後の虚脱感。『カスバの女』で知られた歌手緑川アコの『あなたは命』のレコーディング中、この詩は自分のことのように歌えないと泣きながら吹き込んだ。あのときのアコの姿が今も焼き付いて離れない。仕事みよりに尽きるひとときだった。東京で15年間詩作りをしてきたが、医者に子どもともども健康面で田舎暮らしを勧められ、生まれ故郷の牛久に里帰りした。

時は流れて、作詩家の頂点に到達した池田充男さんは、何でも話せる、話の分かる兄弟子である。その池田さんとのカップル盤がある。池田充男詩、高島忠夫・寿美花代・桑原友美唄『パパは恋人』、中島清治詩、桑原友美唄『リングはいいなア』であるが、この歌は池田さんの顔で生まれたようなもの。当然わが家の宝である。当時10歳ぐらいだった友美ちゃんはどうなにか成長しただろうか。考えただけでも年を忘れる。また、カッブル盤では好きな作詩家の一人、星

野哲郎詩、新井利昌曲、香月えり唄、中島清治詩、清水路雄曲、香月えり唄『お別れ』がある。この歌の歌手は茨城県稲敷郡内の出身だっただけに今でも思い出すのかもしれない。とにかくいろいろなことがあった。板倉文雄先生が亡くなる前、おれも好きな詩だからと書にして残してくれた『灯影の女』(永井えり子唄)も大事なわが家の宝物である。今年もまた、3カ月後の最終の土曜・日曜日にはうしくかつば祭りが行われる。祭りができて30年になるが途中つくば科学万博会場で踊り、1回抜いたため、市の行事としては29回目になる。踊り手が2000人で始まったうしくかつば祭りも今は踊り手が1万人、観光客が20万人、露天商が200軒も出る大きな祭りに成長した。河童ばやし踊りパレードコンテストには、市内の小中学生が積極的に参加するようになり、牛久第二中学校は8連覇を達成中。誠に喜ばしいことだが心配もある。祭りの会場が年々狭くなりつつあるので、そのうち祭りも原点に振り返り開催するときに来るだろうと思う今日のごろである。こんなことを書けるのも恩師故・板倉文雄先生、偉大な兄弟子・池田充男さんほか関係者の皆さん(妻や家族も含む)のおかげと感謝しながら…。

与えられた能力と体力の中で「できるだけのことをしてきた」私は私を褒めてやりたい。

◆歌の駅舎―池田充男

作詩家を志し板倉文雄に師事

池田充男は、昭和7年に茨城県稲敷郡下の純農村・岡田村の大字東端穴1140番地（現在は牛久市東端穴町）の農家の四男として生まれた。5歳のとき命にかかわるような大病を患い、その影響からか決して体の強い子ども時代ではなかったようだ。岡田尋常小学校（戦争中は国民学校）、岡田農学校を経て、県立取手第一高等学校に進む。取手一高在学中は卓球選手として活躍する傍ら、作詩家を志し、近所に住む『泣くな片妻』『泪の夜汽車』のヒットで一世を風靡していた板倉文雄の門に入った。

池田が作詩家としてデビューしたのは昭和29年、22歳の秋であった。念願の作品は、テイチクレコード9月新譜『心の十字路』で、歌手は新人の黒田春雄、後に改名したアイ・ジョージであった。

石原裕次郎の『二人の世界』大ヒット作詩家池田充男にとつては苦節10年の歳月が流れ過ぎた。

テイチクレコードから専属作詩家として迎え入れられたのは昭和36年5月1日である。まさしく波乱のうた書き人生だったろう。本人は好きな仕事だからと笑う。

「第18回オリピック東京大会」が開かれた昭和39年、池田に鶴岡雅義との運命的な出会いがあった。新宿

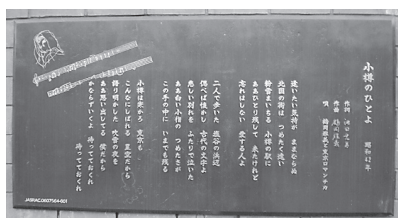
の音楽喫茶でラテン音楽（中南米音楽）を弾いていた鶴岡の人柄とレキントギターにほれ込んだのだった。鶴岡は秋田県出身（生まれは新潟県）で池田より1歳若く、作曲家古賀政男に師事し、古賀ギター歌謡学院で講師の阿部保夫にギターを学び、ラテングループ「トリオ・ロス・カバジェロス」を結成していてそのリーダーであった。その夜同行のディレクター志茂忠男に、何か詩を書いて鶴岡に渡してと言われ、たばこの空き箱に走り書きしたメモが『ローソク・クラブ』『二人の世界』の原型で、トリオ・ロス・カバジェロスから、石原裕次郎が歌う『二人の世界』を生んだのである。これには裏話があるそうで、あるとき裕次郎がカーラジオで聞いたトリオ・ロス・カバジェロスの『二人の世界』に、「これはおれが歌う歌じゃないか：おれがやれば絶対だね」と。裕次郎の予想通り当時のTBS歌謡曲ベストテン22週連続第1位の記録を作った。『二人の世界』のレコード累計売り上げは285万枚余りに達し、裕次郎のシングル累計売上代表20曲の中で、第1位の『銀座の恋の物語』の335万枚に次ぐ第2位であった。『二人の世界』は昭和41年に石原裕次郎主演で同名の日活ムード・アクション映画化もされている。池田は裕次郎に、『青い滑走路』『二人だけのシャンソン』『銀座夜のブルース』、石原裕次郎&八代亜紀の『夜の

めぐり逢い』『別れの夜明け』など50曲ほど書いている。裕次郎がテレビ映画に出演して挿入歌と主題歌を歌い、その詩を池田が書いたのが幾つかある。例えば、昭和52年の日本テレビ系木曜スペシャル『アドミラルカップ・裕次郎は燃えた』の挿入歌『海びとの詩』。昭和55年の企画・制作石原裕次郎プロモーションIIテレビ朝日によるテレビ朝日系放映TV映画『西部警察』の主題歌『夜明けの街』である。『水の流れを忘れた川に 誰が捨てたか赤い花』はその一節であるが、これを『人体の血液のようだ』と評論家は書き印象深い詩である。昭和62年7月17日、日本中が泣いて永遠の別れを告げた昭和の太陽石原裕次郎。池田は生涯この日を忘れることはないと言う。毎年、命日のこの日は成城の石原邸に集まり、まき子夫人にあいさつをする。そしてよく晴れた日などは、葉山、森戸海岸に立つ裕次郎灯台を訪れて、今なお残る胸の思いを語りかけるとか。

ひとよシリーズ小樽三部作

池田・鶴岡コンビによる歌作りはさらなる大ヒット曲を生んだ。『小樽のひとよ』である。『小樽のひとよ』は鶴岡がリーダーで結成されたムード歌謡コーラスグループ・東京ロマンチカが歌い累計売り上げが150万枚余りに達し、『旅路のひとよ』『星空のひとよ』へと続くのである。

当時、札幌にはSTV大澤宏一という名物アナがいた。彼が担当する歌番組に急に『粉雪のラブレター』と題する歌のリクエストが飛び込み、その数は毎週増え続けたという。この『粉雪のラブレター』が『小樽のひとよ』に改作され、現在も歌い継がれているが、大澤アナの影響も、この『小樽のひとよ』の大ヒットには大きいと池田はつぶやいた。



↑『小樽のひとよ』歌詩プレート。小樽運河散策路に設置されている。小樽市提供―小樽という地名はアイヌ語『オタルナイ（砂の中の川の意）』が由来。小樽は北海道内西岸第1の港湾都市として発展し、運河沿いには明治・大正両時代の石造倉庫が軒を連ねる。市街地は三方が山に囲まれ、一方が石狩湾に面し、「坂の町」といわれる。小樽は『蟹工船』の作者小林多喜二らゆかりの文学者の2000点に及ぶ資料と品々が展示されている市立文学館や石川啄木歌碑などに見られるように文化の香りが漂うところでもある。恒例の大きなイベントで夏の「おたる潮まつり」は今年の7月23日から25日まで開催され、冬の「小樽雪あかりの路」は2月中旬に開催される。

鶴岡雅義は、自宅の仕事部屋のピアノの前で、作曲中の手を休めて、ふっと遠くを見るような目をして、考え深げに切々と語り始めた。…小樽のひと(女性)は実在であった。私が結成した東京ロマンチカが釧路のキャバレーに出演していた折、メンバーの1人が地元女性と恋に落ちた。しかし、当時における東京と北海道間の交通手段ではその距離があまりにも遠く、この恋は残念ながら悲恋に終わった。私はこの悲恋を歌の題材にして東京ロマンチカのデビュー曲にしようと考え、メロディーを作り、作詩を池田充男先生にお願いした。出来上がった歌のドラマの舞台が古い伝統を持つ小樽になっていた。結成間もない東京ロマンチカのデビュー作品が欲しかったただであつたが、『小樽のひとよ』が一世を風靡する大ヒット曲になるとは夢にも思わなかった。歌のドラマの舞台が観光名所の宝庫小樽であったことも幸運であつた。この曲がなかったら今の東京ロマンチカは存在しなかったと思う、と話を締めくくった。

池田充男は、鶴岡雅義と共に小樽ふれあい観光大使に委嘱されている。また、石原裕次郎が3歳から9歳まで(昭和12年〜18年)の幼少期を過ごした小樽に、平成3年7月、(株)石原裕次郎記念館が開館されたが、池田の『二人の世界』の生原稿も見ることができる。

池田充男の主な作品

池田充男は、2,000曲に及ぶ天文学的な数字の歌を書いてきた。歌手以外に俳優、力士、プロ野球選手が歌う詩も書いた。その代表的作品の一部を挙げてみる。

- ★八代亜紀…池田が昭和46年にテイクレコードの新人女性歌手に出身地熊本県八代郡にちなんで“八代亜紀”と名付けた。デビュー曲『愛は死んでも・赤坂はせつなくて』、『花水仙』、『ふたりづれ』、『恋歌』、昭和52年度日本レコード大賞最優秀歌唱賞ならびに放送音楽賞を受賞した『愛の終着駅』、昭和53年度日本レコード大賞の放送音楽賞を受賞した『故郷へ』、『恋は火の川』を書いた。
- ★五大路子(新国劇女優)…池田は芦原みづほのペンネームを用いて『むらさき式部』(作曲・小林亜星)。
- ★細川たかし…昭和54年に『ゆきずり』(作曲・森山慎也)、『ほたる草』(作曲・森山慎也)、『夜明けの出船』(作曲・伊藤雪彦)。
- ★勝野洋…昭和56年に『幸福(しあわせ)になれよ』(作曲・鶴岡雅義、編曲・竜崎孝路)。
- ★西田敏行…昭和61年にTBS系テレビ放映のドラマ『泣いてたまるか』の主題歌『人生らばい』。
- ★キム・ヨンジャ…雪虫(北海道では10月に入ると雪虫が飛び、その一週間後には決まったように初雪が降るので雪虫といわれているらしい)を題材にして『北の雪虫』(作曲・徳久広司)。
- ★山川豊…昭和59年に書いた『流氷子守歌』は、オホーツクの海に生きる『男の歌』である。

◆「岡田小学校」校歌の作詩者—池田充男—

岡田小学校は、明治7年創立で136年の伝統がある。昭和42年3月の校歌・校訓制定に際して、同校が母校でもある池田が校歌の作詩を担当し、作曲は野崎真一(八代亜紀『愛の終着駅』の作曲者)であった。

一方、池田が生まれた東猫穴町地内の一角に、昭和62年4月1日に県立牛久栄進高等学校が“自主”“剛健”“協和”を校訓に新設開校となった。同年8月の校歌制定に当たり、池田が作詩を担当し、作曲は吉田正であった。

ター担当有沢幸男(現在は音楽活動を辞めている)が『小樽のひとよ』のモデルの恋人であった。— 鶴岡雅義氏提供 —



↑『小樽のひとよ』発売間もないころの鶴岡雅義と東京ロマンチカ左端の Erick Rick

- ★大月みやこ…昭和57年に芦原みづほのペンネームで、浪花女の歌『大坂ふたりづれ』、昭和60年TBS系テレビ愛の劇場『娘が愛した人は』の主題歌『かくれ宿』、平成4年TBS系全国ネット(CBC制作)・ドラマ30(サータィ)〜『許されぬ唄』の主題歌で第34回日本レコード大賞受賞作の『白い海峡』、藤田まさと受賞の『恋ものがたり』、『水仙』、『月の海峡』、『ひとり語りの恋歌』を書いた。
- ★坂本冬美…NHK総合テレビ番組『歌謡パレード89』のオリジナル歌謡曲『艶花恋』(作曲・猪俣公章)。
- ★芹洋子…平成5年にNHK新ラジオ歌謡の詩『ふるさと景色』(作曲・手仕事屋さち兵衛)。
- ★テレビ出演…昭和62年にNHKテレビ札幌放送局番組部から依頼され、『北の賛歌』に出演した。池田が『北海道に魅かれる気持ちを存分に語る』番組だった。
- ★服部浩子…平成6年に『海峡わかれ町』を書く。同10年に書いた『旅路の花』で作詩大賞受賞となった。
- ★香西かおり…香西かおりに初めて書いた作品『最北航路』で平成17年度の作詩大賞と同19年度の藤田まさと賞を受賞した。「藤田まさと賞」というのは素人の間ではあまり聞かれないが、「歌謡詩本流を守る」に最もふさわしい演歌作品に毎年贈られていて、作詩家にとってはあこがれの賞である。平成19年度の同賞制定委員長は星野哲郎である。
- ※さらに、渡哲也『ギターと旅びと』、菅原文太『吹き溜まりの詩(うた)』、美空ひばり『湯の宿』、島倉千代子『あなたの小樽』、小林幸子『別離』、春日八郎『あゝさすらい』、青江三奈『ぼやき』、北大路欣也『冬ざれ川』、杉良太郎『北の女』、瀬川瑛子『夫婦づり』、天童よしみ『夜明け』、里見浩太郎『愛の行方』、石川さゆり『涙づり』ほか数多くの作品を書いている。

《寄稿》

人生ふと立ち止まり―池田充男―

少し気取った題になるが、年を重ねてここまで生きてきて、ふと立ち止まり周囲を見まわしたとき、はるか遠い、どこか、うそ寒い空に突き当たり、その辺りでこの目が泳ぐ。もう戻ることがない昔を振り返るのは仕方ないことだろう。

私、池田の作詩家デビューは、昭和29年テイクレコード9月新譜『心の十字路』。歌手は後のアイ・ジョージこと黒田春雄という新人だった。以来、明けても暮れてもペンを握り、専属の肩書きが勲章で、それが欲しさに頑張ったようなものだった。巡り合った歌手たちは何百人居たのだろう。作曲家、編曲家の先生方しかり。また制作担当、ディレクター、録音ミキサーも数知れない。



→ 香西かおりが歌った『最北航路(日本作詩大賞・藤田まさと賞受賞曲)』での稚内港から利尻・礼文島取材中の池田充男。

私がこれまで書いてきた約

2000曲の数は問題でなく、その時々を命を燃やした記憶が鮮明に残る。うた書きに行き詰まっていたとき巡り合った大月みやこさん、なんてすてきな女性なのだろうと目を見はった。第一作は『大坂ふたりづれ』で、荻原みづほのペンネームで書いたが、『白い海峡』で第34回日本レコード大賞を手にしたのはずうっと後の平成4年である。打ち合わせはいつも彼女のご自宅で自慢の料理がおいしい。西田敏行さんとはやはりテレビの仕事だった。『泣いてたまるか』主題歌『人生らばい』を書いた。一度だけゴルフをしたが、そのときサイン入り帽子を『遊びだよ…』とプレゼントされたが、その現物は手元になかった。『ぼやき』の青江三奈さんも懐かしい。『海峡わかれ町』の服部浩子ちゃんも『旅路の花』で作詩大賞を取ってくれた人。つい先日20周年記念コンサートを開いたがしとやかな女性になっていた。美川憲一さん、キム・ヨンジャさんと北国シリーズを完成させたがどの作品にも色香がにおう。『ゆきずり』、『ぼたる草』、『夜明けの出船』の細川たかしさん、その声量の豊かさは気持ちが良い。

一曲だけでも仕事がしたいと願っていた香西かおりさん、その念が通い『最北航路』を書いたが、文化放送音楽出版社の友人と稚内から乗った船はクイーン宗谷で、その船中で広

告の裏にメモ書きしたものが基歌になっている。作詩大賞と藤田まさと賞、ダブル受賞に池田は泣いた。

思い付くままに長々と書いてきた。しかしこういう記録は、話を聞き取っていた方がいいのかも知れない。先日、歌手45周年を祝う会を開いた五木ひろしさんは、アルバム『おんなの絵本』で2曲一緒した。その礼儀の正しさに頭が下がった。ずうっと昔私が八代亜紀を書いていたころ、五・八戦争などとタイトルを付け、どちらが先にレコード大賞を取るかなどと週刊誌は書いたものだが、それも今は遠い昔である。

歳月は移って、ある日、コロムビア制作プロデューサーから1本の電話が入った。船村徹先生と仕事をし

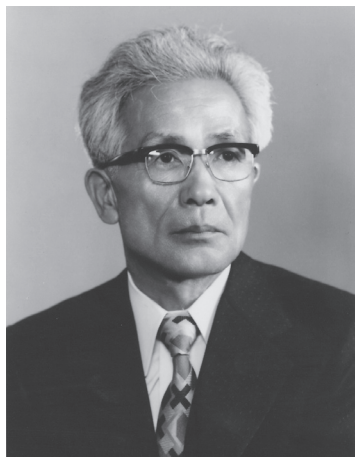
てほしい…。北海道網走出身の好青年、名前は走裕介という。久々に池田は命を絞った。デビュー作『流水の駅』が完成した晩、制作船村組は、先生のおごりでグラントパレスで乾杯をしたが、酒も飯もうまかった。そして11月11日、第2作『人駅』が完成して私はこの原稿を書いている。

最後になつて書きしるしておきたいものは？と自問自答して、紙面には似合わないかもしれないがお許しをいただきたい。永年連れ添ってきた配偶者と共に叙勲を受けたとき、皇居前庭で写した写真一枚は、わが身の宝物です。

平成21年11月15日(作詩家)

◆「下根中学校」校歌の作詩者―板倉文雄―

池田充男と中島清治は、共に板倉門下である。昭和25年・26年・27年ごろに板倉が書いた『泣くな片妻・涙の夜汽車』が作曲平川浪竜(後に『岸壁の母』を作曲)、唄真木不二夫で大ヒット。『悲しい酒』など数多くのヒット曲を書いて作詩界の大御所だった石本美由起(平成21年逝去)は若き日に「板倉文雄を胸中ひそかに生涯のライバルとしていた」という。板倉は昭和57年開校の下根中学校校歌を作曲の平川浪竜と書いている。



→ 在りし日の板倉文雄(大正11年(1922年)〜平成元年(1989年)。岡田村大字東大和田(現東大和田町)出身。